

# トウールの誘惑

Tulu's Seduction



ジョエヴェーリ園は賑やかだった。旅回りの見世物一座の興行で、大小色とりどりの天幕や小屋が並んでいた。呼び込みの声、太鼓と喇叭の楽の音、客たちの騒めき、子どもの声があちらこちらから聞こえてくる。

「さあさ、お立ち会い。大都サンジェリイは初お目見え、ルジーク一座の見世物だ！ いかに目の肥えた大都の皆々様といえども、当一座の出し物には、びっくり仰天すること間違いなし！ フランジースコでは王太子様までご覧になって、これは一流とお墨付きを下さった……」

大天幕の前で、紫色の派手な帽子に緑と朱の市松模様の胴着を着込んだ太った男が、口上を並べ立てていた。ルジーク一座というのは聞いたことのない名前だったが、フランジースコの北か東の方から幾つかの街を経て、サンジェリイにやって来たらしい。

口上とは裏腹に絵看板や幟からすると、出し物は特段珍しいものではないさそうだった。水晶玉や絵札の占い、怪力男の岩石砕き、蛸男の縄脱け、赤い森から来たという狼女、怪奇双頭の馬、矮人と大男の掛け合い芸、もちろん、火吹き男だっている。大天幕の中では、玉乗りの軽業に馬の曲乗り、短剣投げの妙技、大ぶらんこ乗りに綱渡り。

私は長椅子に腰を下ろし、園地の楽しげな人々をぼんやりと眺めた。秋空は青く晴れ渡り、色づいた木々の赤や黄の葉叢が鮮やかな対比をなしている。風もなく、この季節にしては暖かな日だった。クーリカフ街の探偵局兼ねぐらの扉には本日休業の札をかけ、剣も帯びずに私は当てどない散策に出た。イヌン川の堤沿いに歩いて、あまり来ることのないこの広い庭園にたどり着いた。

私はいささか日々に飽いていた。得体の知れぬ事どもが絡む事件にいつの間にか首を突っ込み、魔剣を振るって切った張ったを繰り返す稼業に食傷していたのだ。かといって、近郷近在へ旅する気力も起きなかったのだ、何とはなしに川沿いの道を歩いてみたのだ。

歩き出してから気づいたのだが、今日は休日だった。ジョエヴェーリ園

には仲睦まじき男女や幸せそうな親子連れが繰り出していった。

私は長椅子に座り、屋台の酒を飲むわけでもなく、ただ、見るともなしに人々を眺めていた。ある意味、私の知らない異世界が広がっていた。そこに惹かれて感傷的な気分になるというわけでもなかったが、醒めた心はその平和な光景が妙に生々しく入り込んできた。

やがて、ぼんやりとした人々の流れの中から、一人の娘の姿が浮き上がった。眩いような金色の巻き毛を背中まで垂らし、瞳は澄んで青い。青白い肌には、うっすらと雀斑が浮かび、小さな唇だけが鮮やかな珊瑚色に色づいていた。

はっとするような美貌だったが、歳はまだ十かそこいらだろうか。娘は透かし編みと鬘飾りが幾重にもついた白い衣裳を身に着けていたが、意匠は妙に古びて見えた。古い絵図から抜け出してきた幼い姫君といった風情があった。

娘は行き交う人々の間から、真っ直ぐに私の方を見ていた。碧眼がこちらを見据え、小さな唇がわずかに笑みを作った。

何組もの人々が視界を遮り、人波が途切れると娘の姿は消えていた。休日の庭園で私は幻を見たような気がした。

「おじさま、私と遊んで」

突然、すぐ側で声が聞こえて、私は驚いた。振り向くと長椅子の後ろに金色の髪の娘が佇み、ふっくらとした頬に小さな笑みを浮かべていた。

「何だって？」

娘は、長椅子の端を回ってくると、もう少し大きな笑みを浮かべて、同じ言葉を繰り返した。

「おじさま、私と遊んで」

「父さんか母さんか、一緒じゃないのか」

「一人よ、すぐ近くに住んでるんですもの」

「二人で見世物見物かい？」

「一人じゃつまらないわ。だから、おじさま、私と遊んで」

娘は薄い鬘飾りのついた袖口から白い手を伸ばして、私の手を取った。柔らかい小さな手が私を長椅子から立ち上がらせた。娘の手は思いの他、冷たい気がした。

娘は歩き出し、私たちは手をつないで、園の中をぶらぶらと歩いた。傍から見れば親子連れに見えるだろうか。

「君の名前はなんていうんだい」

「トゥールガルドよ。トゥールでいいわ。おじさまは？」

「僕はスナブ・ランケンだ。ランケンでいい」

「そう、でも、おじさまでいいわ」

「おや、そうかい」

屋下がりの庭園で、トゥールは噴水で足を止め、この大きな庭園の生みの親カガティ宰相の銅像を見上げ、三本の大樹の下で落ち葉を撒き散らした。近くに住んでいると言っていたが、まるで初めて訪れたかのように、物珍しげにあちこちを歩き回った。

といっても、子どもらしく歓声をあげたり走り回ったりするわけでもなく、愛らしい笑顔にもどこか醒めた気配が感じられた。

私は歩きながら、両親は何をしているのか、学校に通っているのか、兄弟はいるのか、といった話を投げかけてみたが、娘は私の質問に答える熱意はほとんど持っていないかった。

「そんなお話つまらないわ。せっかく遊びに出ているのに、つまらない話はいらないで、おじさま。それじゃあ、まるでストラスト先生みたいよ」

ストラスト先生が学校の教師なのか、家庭教師なのか、聞くのは止めておいた。

園内を一回りすると、私たちはルジーク一座の見世物を見て回った。占い小屋には入らなかったが、怪力男が脆そうな岩を砕くのを見て、蛸男がいささか痛そうに関節を外して縄脱けをするのを見て、作り物の耳と尻尾

をつけた毛深い狼女を見て、怪奇双頭の馬、矮人と大男のどたばた騒ぎを見て、火吹き男が油臭い炎を噴くのを見た。双頭の馬は作り物ではなく、本物だった。玉乗りや曲乗りはなかなかの腕前で、短剣投げは危うく的女に当てそうになったが、それも芝居の一つかもしれない、大ぶらんこと綱渡りは、練達の技と言ってよかった。

トゥールは相変わらず醒めた笑顔で一座の芸にお義理のような拍手をした。楽しんでいるのかどうか、私にはよくわからなかった。

粗方、見世物を見終わったので、私は露店で包み焼きを買った。

「腹が空いたろう」

トゥールは私が差し出した食べ物を不思議そうな目で見た。

「これは何？」

「挽き肉を粉を焼いた皮で包んだものだ。深窓の御令嬢は食べたことはないかね？」

娘は一人で納得するかのように小さくうなずいて、「おなかは空いてないの」と言った。私は仕方なく一人で包み焼きを食べた。少々塩気が効きすぎていた。

やがて西からの光に、天幕も木々も銅像も金色に染まり始めた。

「そろそろ、帰った方がいいんじゃないか。送ろう」

私の言葉にトゥールは曖昧にうなずいて、私の手を引くようにして歩き出した。娘はジョエヴェーリ園の出口に向かっていているわけではなく、ただ無目的に歩いているように思えた。次第に人気のない方へ娘は私を導いていき、庭園の端の細い川沿いに小さな東屋を見つけると、そこに入り込んだ。

剪定が行き届かないのか、伸びすぎた周囲の木々は東屋を覆い隠すように、ちょっとした隠れ家の雰囲気だった。寄棟の鱗葺き屋根の下には、大振りの長椅子と卓子が設えてあった。

「トゥールお嬢様はここにお住まいかね。ちょいとばかり風通しが良さ

やしないか」

「そう？ 私は平気だけど」

そう言っつて、トゥールは私の首に両腕をかけた。不意をつかれて私が長椅子に座り込むと、すかさず膝の上にまたがって、体をすり寄せてきた。「やっぱり、寒いかしら。それにおなかも空いてきた」

娘は私の耳元で囁き、柔らかな頬をすり寄せ、唇を重ねようとした。

「やれやれ、とんだお嬢様だ。僕をとって喰うつもりかね」

「そうよ、おなか空いたの。おじさまを食べてもいいでしょう」

娘の小さな身体は甘い女の匂いがした。冷たかった肌はいつのまにか温もりを持ち、私の耳や頬をなめる柔らかな唇と舌先は湿って熱かった。

「駄目よ、君はまだ子どもだ、こんなことしちゃいけない、なんて言っつては。それじゃあ、ストラスト先生とおなじよ」

「ストラスト先生に同情申しあげるよ。君が生徒では生きた心地がしない」

私はトゥールの抱擁を振りほどこうとしたが、不思議と腕に込めた力がどこかに逸らされてしまうようで、彼女を押しつけることができない。

「おじさま、私と遊んで、遊んで」

くすくすと笑いながら、娘は私の上のしかかり、馬乗りになると、襷飾りだらけの服をたくし上げて、一気に脱ぎ捨てた。肌着の類いは何も身につけていなかった。夕闇の中に青白く裸身が浮かび上がって見える。胸の先が少しばかり突き出してはいるが、どう見ても十ばかりの子どもの身体だった。

「ねえ、私、きれいでしょ。ほら、よく見て」

トゥールは私の上で得意げに裸身をくねらせて見せた。無毛の秘部を私の股間に押しつけ、小さな尻をゆっくりと振る。

「いい加減にするんだ。子どもとする気はないよ」

トゥールは芝居じみた膨れっ面をして見せ、すぐに嘔き出して笑った。

「そう、じゃあ、少し大人になってあげろ」

娘は身をのけぞらせて、金色の髪をかき回すような仕草をした。髪が裸身を覆ったかと思うと、急に彼女の身体が重みを増したように感じられた。

もう一度トゥールが髪をかき上げると、そこには年頃の娘がいた。突き出した乳房と細い腰の下には、女らしい艶く曲線を描く下腹と尻が続いていた。乱れた黄色い髪の下の面立ちは、大人びてはいるものの間違いなくトゥールのものだった。

「これなら、いいかしら、おじさま」

少し低くなった声でトゥールは囁き、私の服の釦を外し始めた。香気を放つ柔肌が全身に絡みつき、私は何の抵抗もできなくなった。

小さなびちゃびちゃという音がどこからか聞こえてきた。目を開くと、胸乳の上で金色の頭がもぞもぞと動いていた。汗ばんだ小さな裸体が私の上で蠢いている。胸の辺りのむずがゆい感覚は、舌先が胸乳をなめ回しているせいだった。

トゥールは私の胸の上で顔を上げた。頬は赤らみ、唇は血が滴りそうだった。青い双眸が私を見て、満足そうな笑みを作った。

「おじさま、たくさん、遊んでくれたわね」

身を起こし、つかみかかる前に、娘は身軽に私の上から飛び降りた。白い裸身はやはり十かそこいらの子どものものだったが、股間からは滑るものが股まで滴っていた。トゥールは白濁した液を指ですくうと、ぺろりとなめてみせた。

「おかげでおなかがいっぱいになったわ。ありがとう、おじさま」

指先がうまく動かず、洋袴の釦をかけそなたっているとトゥールが言った。

「気が咎めているの？ 気にすることはないので、私がおじさまに遊んでって言ったんだもの」

「君がただの子どもならそういう気にもなるかもしれないがね。いや、得難い経験をさせてもらったよ」

私はようやく釦をかけ終え、トゥールも脱ぎ捨ててあった古びた衣裳を頭からかぶって身につけた。その仕草はやけに子どもじみていて——年相応というべきか——奇妙な違和感を感じさせた。

トゥールは今初めて気づいたかのように、東屋に黒々と迫る木々を見回した。董色と藍色が入り交じった西の空に、見世物一座の天幕が影絵となって見えた。色とりどりの明かりが点り、楽の音も聞こえてくる。

「さあ、そろそろ帰らなくちゃ。おじさま、送っていただくさるわよね」  
トゥールは私の腕に手を絡め、答えを待たずに歩き出した。

「君のねぐらはどこだ？ この近くだとすると、ハデロ院の霊園か、それともインヴァレの共同墓地か？」

「いやあね。おじさま、変なこと言わないで。お墓なんかに住んでないわよ」

トゥールは私の腕を揺さぶって、少し怒ったような声を出した。

しばらく人気のない夕闇の道を歩いたが、見世物小屋に近づくのと急に人通りが多くなった。天幕とそのまわりには無数の提灯や角灯の明かりが下がり、大天幕の周辺には篝火も焚かれていた。笑い声や歓声、それに屋より倍も大きくなったような呼び込みの音が、賑やかに四方から飛び交っていた。

トゥールは大小の天幕や露店の間の迷路のような道を私を引っぱって進んだ。やがて、大きめの天幕の裏手に出ると、幕の掛かった裏口から私を中に引き入れた。

天幕の中はほとんど真っ暗だったが、トゥールは迷う様子もなく、進んでいく。突然、洋灯の明かりが見え、その光の輪の中に血まみれの刃が突

き出された。咄嗟にトゥールを引き寄せ、腰に手をやったが、今日は剣は身につけていなかった。

娘の笑い声が聞こえた。

「おじさま、大丈夫よ。人形なのよ」

血刀を持った男は硝子の目玉で何処とも知れぬ闇を見つめていた。歪んだ笑いが浮かぶ口元は、塗りが剥けて、白っちゃけた地肌がのぞいていた。

幅十イート（約三メートル）ほどの場に、男の像と、肩をつかまれ、今にも刃を突き立てられそうな半裸の女の像、それに体中を切り裂かれて、血まみれで倒れているもう一体の女の像が、配されていた。舞台は画室なのだろう、画架には描きかけの女の絵が掛かり、周囲には恐怖と苦痛に歪んだ安っぽい女の絵が何枚も置かれている。狂気の画家は絵の具なのか犠牲者の血なのか、赤く染まった上っ張り姿で、女に短剣を振りかざしていた。

手前に簡単な解説板があり、〈ヤナハ・ホウエイの血の画室〉とおどろおどろしい飾り文字が踊っていた。六人の女を戮り殺しにして、その苦悶の姿態を描いたフランジースコの画家だ。

トゥールは凄惨な殺人現場の再現にも平然とした様子で、画家の指から外れかかっていた作り物の短剣を直していた。

「しっかり持たないと、いい具合に血が出ないでしょう」

娘は画家の人形に言い聞かせるようにそう言うと、私を暗い通路の先に引っぱっていった。次の場面は寺院か神殿の中のようなだった。中央の石造り——のように見せかけた——祭壇の上には十三四の美童が裸で四つん這いとなり、そこにのしかかるように、豊満な身体の女が怪しげな硝子の瓶を持って、迫っている。奇怪な事に腰布一枚で隠された女の股間には一物がそそり立っているようだった。稚児は恍惚とした表情で、快楽をもたらずもの——薬液か女の一物か——を待っているようだ。

〈マヌサンゼリの悦楽殿〉と題された案内板には、古のガフェススの都でマヌサンゼリなる女僧が耽った秘密の快楽について記してあった。

次の場面は医師にして人体標本の収集家ヴェルネークライト、角を曲がると戦場の拷問愛好家ギラスヌス將軍、さらにマヴェエ碧の虐殺と、半ば伝説と化した血なまぐさい情景が人形と小道具によって再現されていた。

トゥールは殺人者たちに微笑みかけ、芝居じみた挨拶を送り、歩いていった。私の手を引く小さな手は、次第に東屋での温もりをなくし、冷たく強ばっていくように感じられた。

何度か角を曲がると、そこはどこかの宮殿の一室のようだった。張りぼての彫刻付きの円柱に囲まれた部屋で、ほとんど全裸の男女が数名、しどけない仕草で絡み合ったり、横たわったり、ひざまずいたりしていた。トゥールと同じくらいの少年もいれば、少し年上の乳房が膨らみかけた娘もいた。大人の男の一人は寝台に仰向けに縛りつけられていた。あられもない姿に縛り上げられた女もいた。絨毯の上には幾つもの淫具や小振りの鞭、革手錠などが転がっていた。

「おじさま、ありがとう。とつても楽しかったわ」

トゥールは淫らな姿を晒し続ける宮殿の人々に一瞥を送り、少しだけ寂しそうな顔をした。

「帰るわね」

トゥールがつま先立って上を向いたので、私は身を屈めて、色の薄れた小さな唇に接吻した。娘の唇は乾いて強ばっていた。

短い接吻が終わると、トゥールは奇妙なぎごちない動きで作り物の宮殿に入り込み、床から鞭を拾うと寝床に縛られた男の側に立った。鞭を振り上げる仕草を見ると、そのまま動かなくなった。

「トゥール」

呼びかけてみたが、少女の人形は何も答えはしなかった。

説明板は洋灯の明かりから外れた所に置いてあり、読み難かった。題は

「クォーボーラの狂宴」で、サラメヌート一帯を数百年前に支配したクォーボーラ卿一族の乱行を再現したものらしかった。クォーボーラ一族は重税を課す一方で、兄弟姉妹親子で淫行に耽り、また、宮殿に仕える者や城下の領民も慰み者にしたので、反乱を招いたと記されていたが、その後は文字が薄れていて読み取れなかった。

「遊んでやったのか」

突然、背後からかすれた声があった。振り向くと、しわだらけの顔の小柄な老人が角灯を手に立っていた。

「姿が見えねえから、またどこかで悪さしとるのかと思つとつたが、帰ってきて良かった。これで、開けられる」

老人は、一人で納得したように話し続けた。

「あんた、もう来ちゃいけねえよ。一度ぐらいなら、遊んでやっても大丈夫だが、二度三度となると、命が危ねえ。わがまま娘だからな、際限がなくなる」

私は老人の忠告に同意を示した。

「そうだろうね。この娘はクォーボーラの姫様かい？」

「そうだ。エツラ・トゥールガルド・クォーボーラ、物心ついた頃から淫蕩な氣質明らかで、大人も子どもも親兄弟も餌食にした。可愛い淫魔と呼ばれた娘さ。そこで寝床に縛られているのは、実の父親のクォーボーラ卿だ」

そういう老人の口調はどこか自慢気にも聞こえた。

「クォーボーラ卿の一族は、反乱の後どうなったんだ？ 字が薄れて読めない。少しばかり史学はかじっているけど、この話は知らなかった」

老人は、細い首をぎくしゃくと動かしてうなずき、「ちょっと待ってな」と言つて、暗色の布で隠された壁際の取っ手らしきものを引いた。

どこからか、ぎりぎりという歯車が軋むような音が聞こえてきた。もう少し重い何か擦れ合うような音も聞こえて、狂宴の舞台がじりじりと動

き出した。どうやらそれは小型の回り舞台となっているようだ。

舞台が回転すると、そこに現れたのは、街中の広場らしき所だった。背景には燃える宮殿と、拳を振り上げ興奮した様子の群衆の姿が荒っぽい筆致で描かれている。

絞首台に数人の傷だらけの半裸の男女の人形が吊るされており、残る一人の娘も縄をかけられ、今しも首を括られようとする情景が再現されていた。引き裂かれ、血の染みが浮き出た衣裳をまとつたその娘は、東屋で見た成長した幻影のトゥールにそっくりだった。乱れた金髪の下の青い瞳は、これから処刑されようとしているとは思えない、不敵な眼差しでこちらを見据えていた。

「クォーボーラ一族は、一人残らず殺されたのさ」

老人はひどく嘎れた声でそう言った。

「吊るされた骸は鳥についばまれ、犬に齧られ、朽ち果てるまで広場にそのままにされたという話だ。後のサラメヌートの人々はクォーボーラの治世を恥と思ひ、史書からも抹殺した。だから、あんたも知らないんだろ」

染みだらけの手で、老人は乱れたトゥールの金髪を優しく整えた。

「人形はあなたが作ったのだろう。どうしてクォーボーラ一族の話を知っていたんだ？」

老人は視線をしわの中に隠してうなずいた。

「儂はサラメヌートの出だ。史書には記されていなくとも、古老の話の中には残っている。子どもの頃聞かされた恐ろしい話が役に立ったのさ。トゥールの人形を作っている時は、奇妙なほど興が乗ってな。寝食を忘れるほどだった。特に子ども時分のものはな、ただの見世物だが、儂にとっては生涯の傑作だ」

老人はもう一度壁の取っ手を動かした。再び歯車の軋む音がして舞台が回り、幼いトゥールが先ほどと変わらぬ姿を現した。

「不思議なことが起こった。僕は妖術使いでも何でも無い。ただの人形職人だ。だが、ある日、トゥールの人形には靈魂が宿った。サラメヌートの墓地裏で興業なんぞしたせいかもしれないが、はっきりしたことはわからない。クォールボーラ一族に墓などないからな」

老人は少しおどけたように額に指先を当てて、ヴィンズク教の聖句らしきものをつぶやいた。

「しばらくは儂と遊んでいたのさ。だが、儂は歳をとった。えらく速くな。トゥールは貪欲なのさ」

「それで、遊びに出るようになったと？」

「そうだ。姫様のたまの気晴らしさ。そう、悪いことじゃあるまい」

「どこからか、「きやつ」という女の悲鳴と男の笑い声が聞こえてきた。

「おや、客だな。勝手に入ってきちまったんだな。儂は仕事をせにやならん。いいかい、もうここに来ちゃなんねえよ。もうすぐこの街での興行もお仕舞だ。今日のことは夢でも見たと思うんだ」

老人は闇に吸い込まれるように姿を消した。私はその場に佇み、鞭を手にしたまま動かないトゥールの姿をしばらく見つめていた。

近づいてきた足音とくすくすと笑う声が、幻影をかき消した。老人が点けたのか、いつの間にか通路にもぼつりぼつりと小さな明かりが点り、私を出口に導いた。奇怪な出し物はまだ幾つかあったが、目にははいらなかった。

黒い垂れ幕を除けると、角灯や提灯の明かりが幾つも目に飛び込んできた。目の前を何組もの男女や親子連れが楽しげに笑いながら歩いて行く。振り向けば、出てきた天幕の前には、〈狛奇と残虐の館〉と大書きされたけばけらしい看板が掛かり、木戸脇の小櫓の上では、白塗りに口の回りを血が溢れたように赤く塗った男が囁れた声で客寄せの口上を捲し立ててい

た。

「ルジーク一座一番の見世物といえ、ここ〈狛奇と残虐の館〉だ！ 狂える殺人絵師に拷問狂の將軍、淫祠邪教の女司祭、人喰らいの山賊に残酷医師の凶状だ！」

小櫓の男はそこまで語ると、急に背中を丸めて声を落とした。

「他にも、ここじゃ言えないおぞましくも淫らがましい見世物も御用意！」

〈クォールボーラの狂宴〉は「ここじゃ言えない」方の見世物なのだろうか。白塗りの男を見上げると目が合い、男はにやりと笑った。人形師の老人のようにも思えたが、白塗りの下の顔はよくわからなかった。すぐに男は視線を反らして口上を続けた。

「怖いもの見たさで一度入ったらもう虜、明日も明後日も御来場だ！ さあさ、度胸試しに御来場あれ！」

木戸の前でためらっていた若い男女がいたが、女の方が男の手を引くようにして中に入っていった。

私はトゥールの小さな手の奇妙に冷たい感触を思い出したが、見世物小屋に背を向けて歩き出した。

二歩三歩行ったところで、何か気がなり、振り返って絵看板に目をやった。看板の右端の方に、やや小さめの文字で「天才人形師ストラスト畢生の傑作！」と書かれていた。

偶然の一致かも知れない。ストラストという名前は特段珍しいものではない。あるいはストラスト先生には子孫がいたのかもしれない。彷徨える可愛い淫魔の靈魂が、その子孫を引き寄せたのかもしれない。

老人に問えば、何かがわかるかもしれないが、私はそうはしなかった。少し早足でイヌン川の堤に向けて歩き出した。